

地域公聴事業 四賀地区 市長と市民の「こんだん会」事業レポート

1 開催趣旨

四賀地区は、令和3年度から「地域づくりセンター機能強化モデル事業」のモデル地区として、市民が主体となって地域の課題解決に向けた取り組みを募集し、採択した提案を地域自治支援交付金で支援しました。

今回の「こんだん会」では、3つの採択団体にご出席いただき、令和3年度の活動報告をいただいた後、市長にコメントをいただき、地域で取り組むことの意義についての認識を深めました。

2 日時等

- (1) 日時:令和4年5月30日(月) 午後7時から午後8時15分
- (2) 場所:松本市役所四賀支所3階 303会議室

3 参加者数

臥雲市長ほか20人(採択団体出席者6人、見学者8人、関係職員6人)

4 活動報告

(1) 桑の実ジャム製造・販売事業(四賀元気プロジェクト)

養蚕が盛んだった頃の名残で、地区には桑の木が沢山残っていることに注目し、桑の実のジャムづくりを始めて14年目(ジャムへの加工は、南安曇農業高が協力。ジャム以外での商品化も研究したが桑の実の性質上、うまく行かずに断念した経過あり)。作業人員の高齢化等が影響し、年々収穫量が減ってきていて、一昨年は当初の1/5の200kgとなり、販路も縮小せざるをえない状況だったことから、令和3年度は、支援金をいただいて圃場整備と作業人員減少を補うための知的障がい者施設等との協働を中心に行った。圃場整備により、令和4年度は、収穫量増は見込めるかたちとなった。ただし、とくに収穫作業は、その年の気温等の状況で前後し、収穫適期は2週間で、午前中に終わらせないと収穫した桑の実が傷んでしまうため、人員確保や作業方法の見直しが引き続いての課題となっている。

(2) 目指せ！四賀のナショナルマーケット事業(四賀を結び隊)

コロナ禍で、四賀地区の雑貨、飲食店等の販路が断たれた状況を何とかしたいとの思いから、約2年前から毎週金曜日、支所でのお弁当販売から始め、徐々に仲間を増やしながら、現在まで活動を継続している。この活動で、支所にいらっしゃる地区の住民の生の声をお聞きし、対外的ではなく、地域の人に地ものを届けたいと思うようになった。そして、四賀をもっと知ってもらうために年4回の「大結ぶ市」を開催するようになり、四賀地区内で認知度を上げようと、支援金をいただいて地区内全戸配布のチラシ等の作成・配布を行った。その結果、コロナ禍にも関わらず地区内の人に250～400人来場いただくことができた。こうした地域にあっては、行政とタッグを組んで浸透させ、いろいろ取り上げていただくことが必要だと実感した。今後は、買い物のできる力所の少ない四賀地区にあって、支所に来ることのできない方にどう対応していくかということも課題として引き続き取り組んでいきたい。

(3) フリーペーパー「たね」制作・発行・配布事業(フリーペーパー「たね」編集部)

東京から松本へ、そして、四賀に移住して、暮らしの中で発見したこと、地区や暮らす人の魅力や思いを伝え、地区に関心を持ってもらおうと、2021年4月に年4回の季刊誌として創刊。内容は、子育て世代が中心になっているが、学生やお年寄りにも受け入れてもらえるようにバランスや移住者と地元の方がつながりを深めて語り合うきっかけになることも意識し、四賀地区では全戸配布している(1600部)。ほかに松本市内外の店舗34カ所に500部を設置するなど、交付金のおかげで、当初の予定より規模を大きく展開できた。こうした制作は初めてで試行錯誤の連

続。「もっととっつきやすいもの」、「ほっこりするもの」がいいとの意見もいただき、いろいろ悩んだこともあったが、全体のバランスや文字の大きさ、用紙のサイズなどを変えて模索を続けている。大変なこともあるが、たくさんの方がやりがいや学びがあり、成長する喜びを感じている。今の自分にできることは続けること。学びながら、自分らしさを発揮して、地域に貢献し、前向きな表現をしていきたい。

5 市長のコメント

本来、人がある程度住んでいて、町があるときにはなくてはならないものが、人が少なくなることでなくなってしまった。それが、メディアであり、マーケットや小さなエリアで配達を行うことであったり、地場産業であったりする。これを皆さんが今のスタイルで作り直されようとしていて、その萌芽を皆さん自身、手ごたえを感じられていると思った。

フリーペーパーの取り組みは、過疎で、こうしたものを作る人はなかなかいない中で、とても素敵でセンスのよさを感じた。私も経験があるが、自分らしさを失わないことと、読み手が存在してこそ書く意味があって、相手に寄り添うこととのバランスは、物事を伝えるうえでの永遠の課題だと思う。それを発行し続けることで、少しずつ地域の人たちを変えているのだろうと拝見して思った。

結ぶ市の取り組みでは、最初に市(いち)をつくり、その後、そこに来ることのできない方がいるということで、そこに出向いていくという展開を始めたとのこと。こうした展開は、食だけでなく、見守り等のサポートにもつながることだと現場で感じ取られていて、それに関わりを持とうとされている。このような松本市全体でも考えていかなければならないことを、早いスピードで取り組まれていると感じた。

桑の実ジャムの取り組みは、地域のものを使って何とか収益に結びつけて、この地で生計を立てられるようにするもの。課題は人手という話があったが、区内ということに限界があるとすれば、今の時代、インターネット上に来てもらえるようなプラットフォームを作り、マッチングさせることができる。そういう部分で市にできることも考えたいと思った。地域で生み出したものを地域で活用するという地産地消は、あるべき道。そこで収益を生み出し、事業を継続させ、雇用を生み出し、業として成り立たせることが松本市として問われている。エネルギーの地産地消もしかりで、今その方向が求められている。

四賀地区の課題は、どの地域にも共通の普遍的な部分がある。状況の厳しいところこそ、新しい動き、地元の人たちと新しく来た人との接点生まれ始めていて可能性を感じている。松本でこれから必要になることを四賀で実践されている。これを広げていくこともあるのだろうと感じた。

今回の交付金は、ささやかな額ではあったが、こうした動きにつなげていただいた。行政は初期の段階でのお金と皆さんの活動に公的信用を与えることを引き受ける。それが役割だと思っている。それにまず向きあうのが地域づくりセンターであり、地域づくりセンター長。そのうえで皆さんの活動によって更に幅を広げ、自走につなげていただきたい。

今回の取り組みを聞くなかで、私の仕事は、公平かつ納得感のある優先順位で地域の実情に合わせた予算の使い方をしてもらい、少しでも新しい動きを作ること。その認識を新たにできたと感じる。

